

## 『ミャンマーからモロッコへ：民主化運動を垣間見て』



元赤十字国際委員会ミャンマー支部勤務

在モロッコ大使館専門調査員 億 栄美

ミャンマーでも民主化運動に遭遇し、モロッコでも民主化運動に遭遇するとは夢にも思わなかった。私の赴任するところでは民主化運動が起こるのではないかと言う友人もいるほどだ。二国間の共通点を探るのに苦労した。敬虔な仏教国ミャンマー、敬虔なイスラム教国モロッコ。アジアとアフリカ。アラブ人とアジア人。お米の国、パンの国。全く共通点のない二国間において私が見た唯一の共通点は「民主化運動」だった。

ミャンマーは日本人にとって身近な国。ミャンマーというよりもビルマと言った方がピンとくる世代の方も多いであろう。敬虔な仏教国であり、微笑みの国として知られるミャンマー、そのミャンマーで日本人ジャーナリスト長井氏も銃弾に倒れた民主化運動からはや3年以上の月日が経過した。テレビの映像などから赤紫色のサフラン色の袈裟をまとい政府に抗議する僧侶の姿を思い出す人も多いであろう。2007年9月22日から本格化した民主化運動の5日目、国軍は一般市民に発砲した。徐々に膨らんだ僧侶を中心とする民主化運動はその袈裟の色からサフラン革命と呼ばれるが、その民主化運動は単なる運動で終わってしまった。

ちょうどその頃私は赤十字国際委員会（ICRC）ミャンマー支部所属でありながら、溜まっていた4ヶ月の休暇を取りヤンゴンの自宅にいた。2006年からICRCの要の活動である刑務所訪問の許可が下りなくなっており、ついに、2007年6月、守秘義務を貫くICRCとしては非常に珍しい「公開告発 Public denouncement」という手段に出て、軍政を名指しし、ミャンマー政府は国際人道法に違反していると発表した。ミャンマーはジュネーブ条約（通称：国際人道法）に署名している。以来、仕事がほとんどなくなり、強制的に取らされた休暇である。その頃は一時期53名いた外国人職員が3名になっていた。ほとんどが、アフガニスタンやイラクに飛ばされた。とりあえず、CRC事務所に電話をする。「出勤しようか（したい）」「できることは限られているからいいよ。ただ、デモを見に行ったりして、テレビに映ったりするのはやめろ。ICRC職員がデモに荷担したって言われるからな。」とスイス人所長の冷たい返事。内線をミャンマー人職員に繋げてもらう。職員たちは次々と拘束される僧侶たち・一般市民の家族の訴えを聞いていた。行方不明になった人たちの名前をリストアップし行方を追うのがICRCの仕事だ。大抵は家族からの情報が早く、ICRCの出番と言えば、留置所にいる家族に会いに行けるように旅費を提供することになった。家族訪問プログラム（Family Visit Program）と呼ばれるものである。できることは非常に限られている。話は前後するのだが、私は2001年から2007年まで赤十字国際委員会(ICRC)のミャンマー支部

でビルマ語、フランス語、英語の通訳としてミャンマー全国の刑務所、労働者収容所を転々としたのち、離散家族再会事業部(Tracing Department)に配属された。守秘義務があるので刑務所の状況などについて言及することは控えさせていただくが、ICRCの任務は紛争国においての捕虜(ミャンマーの場合は政治犯)の人権を確保することにある。具体的には受刑者(政治犯および一般受刑者)と「単独インタビュー」を行い、数百人のデータを纏めた後、彼らの生活改善を目指して、政府側に改善点を提言していくのが主な仕事である。ここで言う人権は国際人道法の範囲の人権である。拷問を受けない権利、生きるための衣食住を受ける権利という人としての最低限の権利である。政治犯の中から時間があるので英語の本が読みたいという要望がよくあり、刑務所所長に許可を得た上で寄付をするのだが、そのインタビュー中に「読書の要望に関しては、国際人道法に則っているICRCのマネート以外ですよ。こういった贅沢な要望は国連に言うべきですかね」とスイス人の班長を驚かせた者もいる。政治犯の中でも通称VIP政治犯と呼ばれるアウンサンスーチー女史の国民民主連盟の幹部である。まだ獄中にいる彼らはどうなっているのか。ICRCの活動は制限されたままだ。

刑務所訪問、政治犯との対話、もう二度とすることはしないだろう。公開告発に出たICRCの痛手は大きい。「サフラン革命」の一週間後に日本に帰国した。

日本に帰国し、心機一転、全く違うことがしたくなった。外務省をインターネットで検索。「在モロッコ大使館専門調査員、モロッコ経済の専門家募集」と記載してある。「日本にモロッコの経済専門家はいるだろう、途上国で勤務経験があり、フランス語で仕事をした経験もある。いちかばちか履歴書を送ってみよう」と一連の書類を送付。3週間後にはモロッコに行くことになっていた。契約ベースではあるが「にわか外交官」として大使館勤務となった。日々の仕事が楽しい。専門調査員の中でも私は非常にラッキーな方だろう。人間関係はすこぶる良く、在モロッコ大使館は若手外交官の集まりで大学のサークルを思い出させるような雰囲気がある。そんなモロッコで経済と広報文化を担当しているのだが経済的に変化のある時期に着任できてこれまたラッキーだった。ここ数年モロッコは経済の自由化を図り、石油・ガスなどの天然資源がないモロッコは巧みな外交政策を展開している。

また、この北アフリカ地域がこんなにも注目されるとは思わなかった。湾岸諸国と欧州の間で今までそれほど目立たなかった存在が、チュニジア、エジプトから始まった民主化運動から「アラブの春」と称され世界がその動きに注目している。この「アラブの春」であるが、モロッコと常に比較対象国であったチュニジアとエジプトの二カ国で始まったことは注目すべきである。北アフリカ諸国の中でもアルジェリア、リビアといった産油国は別格の存在で、その他チュニジア、エジプト、モロッコは比較的類似した点を共有していた。治安も良く観光立国であり産業の多様化を進め人件費も安く外国企業誘致に積極的な国。汚職が蔓延し、若者の失業率が高いところまで同じである。違いと言えばモロッコは王国であり現在の国王は相対的に人気があり国王を政治の長、宗教の最高権威、国軍の最高指揮者とする君主制に異義を唱える声は小さく、日頃から大統領への不満が募っていたチュニジアとエジプトと大きく異なることだ。また、モロッコで比較的安定した民主化運動が展開された理由の一つとして物価上昇率が直近5年平均2%に抑えられていることも挙げられるだろう。補助金を投入し、庶民の丸パンの価格を1.2DH(約12円)に抑えるなど、モロッコ政府の押さえるところは押さえておいた経済政策が功を奏した。モハメッド6世国

王は前国王との比較で言えば、かなりリベラルで経済の自由化を進める国王なのだが、現在のところ専ら恩恵を受ける者は富裕層であり貧富の差は依然として激しい。モロッコは二人に一人しか字が読めない。教育費に回すお金がない、食べるだけで精一杯の貧困層が多く存在する。

そんな状況の中、モロッコにも「民主化運動」がやってきた。チュニジアでのジャスミン革命の英雄が焼身自殺で死亡した後、モロッコでも5名が焼身自殺を図り、2月12日には1名が死亡した。そういった状況の中、15日、財政を圧迫している補助金の削減を目指すモロッコが異例のほぼ倍増となる追加補助金を決定。その後、2月20日に予測していたよりも大きな規模で民主化運動が起こったのだが、治安部隊の出動もなく平和裡に終わった。ただ、国民が一体となった「元首打倒」を目指す性質のものではなく、あくまでもモロッコの場合は国王を元首とし、さらなる民主主義国家を目指すもので「国王は君臨すれども統治せず」といったプラカードが見られた。フランスの労働組合の流れも受け継ぐモロッコでは従来からしばしば各地で労働組合を中心とした「労働改善要求」の類のデモは展開されていたが、今回はデモの要求に国王の権限の縮小が加わったのが「アラブの春」民主化運動の流れで起こったデモと従来のデモとの大きな違いである。

その2月20日以降、毎月20日を大規模デモの日と位置づけ運動家たちはフェイスブックなどで民主化運動への呼びかけが続いていた。そんな中、3月9日、国王は突如として「憲法改正」の発表といった予想外の決断に踏み切った。6月17日には国王が自らの権限を一部縮小した憲法改正案を発表。二週間後の7月1日には国民投票で是非を問うという国民は短期決断を強いられた。結局、投票率73.46%の賛成票大多数の98.5%（7月2日発表の暫定結果）で憲法改正案が採決される見通しで、一連の民主化運動が終結する形となった。

他方、デモの方とは言う、現在もあちこちで小規模で繰り広げられているが、デモの規模は労働組合、所属機関などで細分化されており、あくまでも労働条件改善、失業者対策などといった従来のデモに戻っている。革命はモロッコ国民の望むところではない。せめて改善してほしいというのがモロッコ国民の願いである。

「民主化運動」。。。思い出せばまだあった。1992年にタイでFacebookならず携帯電話で連絡を取り合ったという中産階級主導の民主化運動「ブッサパー（5月）革命」が起こった時、私はバンコクにいた。国軍が民衆に発砲し、プミポン国王自らが収束に乗り出したあの流血の革命である。国内放送は軍にコントロールされ、CNNニュースの録画ビデオが出回った。インターネットなどなかった頃である。それにしても本当に不思議である。モロッコの次はどこに行こうか。

（以上は個人的な見解で在モロッコ大使館を代表するものではありません。）

（寄稿日 2011年7月19日）